

マンデ語の幼児語における音韻論的特徴についての覚書

西田文信

早稲田大学・fuminobu@waseda.jp

キーワード：マンデ語、チベット・ビルマ諸語、音韻論、幼児語

1 はじめに

本稿では、マンデ語ツァンカ方言を対象言語とし、その幼児語の音韻論的特徴について報告する。マンデ語はブータン王国中部のトンサ県 (Trongsa) 及びワンディポジャン県 (Wangdi Phodrang) のブラックマウンテンの東山麓地域、特にマンデチュ (Mang-sde-chu) の流域に分布する所謂 Bhumthang group に属する言語である。

2 幼児語とは

幼児語の先行研究としては柳田 (1937)、Casagrande (1948)、Voegelin and Robinett (1954)、Austerlits (1956)、Ferguson (1964)、Kelkar (1964)、Bhat (1967)、土田 (1973)、Tsuchida (2009) 等がある。本稿では幼児語を「成人した大人が話す言語 (中略) に対して、大人が幼児に話しかける時の、またやゝ成長した子供が大人に話すときの、優しい甘えた言葉使い (発音、語彙、語法ともに) を指す」(土田 1973:1) ことにする。

3 調査

本稿の依拠するマンデ語のデータは、筆者が 2008 年 2 月以降ブータン王国トンサ県ツァンカ村にて断続的に収集してきているものである。本稿の調査協力者は同村の 6 歳未満の幼児である。ブータンの教育制度における Class PP (Pre-Primary) に就学以前の者の言語を扱う。

4 幼児語の音韻論的特徴

4.1 音素の置き換え (replacement of phoneme)

以下のような音素の置き換えがみられる：

- /b/→/p/ : buk→puk 「息」, bancaŋ→pancaŋ 「酒」
- /b/→/m/ : bal→mal 「雄牛」, bura→mura 「絹」
- /n/→/l/ : nam^H→lam^H 「空」, no→lo 「弟」
- /k/→/kh/ : ka→kha 「雪」, kopi→khopi¹ 「キャベツ」
- /g/→/k/ : gor→kor 「岩」

¹ インド・アーリア語からの借用。借用語にもこのような変化を被るようである。

- /ny/→/n/ : nya^H→na^H 「魚」, nyi→ni 「寝る」
- /ts/→/tɕ/ : tsa→tɕa 「草」, katsa→katɕa 「辛い」
- /r/→/y/ : rau^H→yau^H 「角」, raŋ→yaŋ 「自身」
- /ɕ/→/s/ : ɕa→sa 「肉」, ɕu→su 「尿」
- /ʒ/→/dʒ/ : ʒa→dʒa 「茶」, ʒaŋ→dʒaŋ 「北」
- /hr/→/r/ : hra→ra 「命令形接辞」
- /t/→/k/ : ta→ka 「馬」, tak→kak 「虎」
- /p/→/t/ : capphal→catphal 「太っている」
- /l/→/ø/ : lem→em 「スプーン」
- /n/→/ø/ : namgun→amgun 「冬」, luŋH→uŋH 「話」
- /r/→/ø/ : ra→a 「髪の毛」, ropa→opa 「骨」
- /n/→/ø/ : nor→or 「牛」
- /ŋ/→/ø/ : ŋu→u 「飛ぶ」, ŋoi→oi 「銀」
- /ø/→/?/ : 多数

4.2 子音連続の短音化 (simplification of clusters)

子音連続の 2 番目の位置に立つ /r, l, j, w/ の脱落がみられる :

- /pr/→/p/ : pra^H→pa^H 「猿」
- /pj/→/p/ : pja→pa 「滑る」
- /pl/→/p/ : plik→pik 「直立した」
- /phr/→/pr/ : phrum→phum 「チーズ」
- /br/→/b/ : bra→ba 「崖」
- /bj/→/j/ : bja→ja 「灰」
- /bl/→/b/ : ble→be 「四」
- /mr/→/m/ : mra→ma 「弓矢」
- /kw/→/k/ : kwa→ka 「歯」
- /khw/→/kh/ : khwi→khi 「犬」
- /gw/→/ga/ : gwa→ga 「二」

4.3 挿入 (insertion)

- ŋerin→ŋelrin 「背が高い」
- dzisha→dziksha 「鳥」
- meloŋ→melloŋ 「鏡」
- bura→burra 「それ」

4.4 鼻母音化 (nasalization of vowels)

以下のような鼻母音化が見られる :

zön > zō 「二」

thung > thū 「飲む」

4.5 複音節化 (disyllabification)

以下の語彙形式は歴史的には複音節であるが、成人の発話では通常単音節となるものである：

- ma:p→mar.po 「赤」
- na:p→nak.po 「黒」
- ka:p→kar.po 「白」
- ŋo:p→ŋo.po 「青」

4.6 重複 (reduplication)

幼児語では名詞や副詞を重複することが多くみられる：

- eimbal→eimbalbal 「猫」
- kangul→kangulkangul 「鳥の一種」
- nyema→nyemanyema 「昔々」
- daŋ.p^hu.diŋ.p^hu → daŋ.p^hu.dũ.p^hu 「昔々」

4.7 補充法 (suppletion)

幼児語に特有な語形の中には補充法が見られるものもある：

- dzap→ə:ə:~u:u: 「うんちをする」
- dūp→ei:ei: 「おしっこをする」
- ja→pipi 「鳥」
- khata(liŋ)→khakkak~khokkok 「鶏」
- kwi→waŋwaŋ 「犬」

オノマトペ起源のものとしては以下のものがある：

- eimbal→mi:mi:~mya:mya: 「猫」

4.8 声調

幼児語では成人の言語体系にはみられない contour tone がみられることがある：

- ta^H > ta^R 「馬」
- tak^H > tak^F 「虎」
- pak^Hpa^H > pak^Rpa^H 「皮」
- jak^L > jak^F 「手」
- bit^Lma^L > bit^Fma^F 「ふくらはぎ」

4.9 音韻変化への示唆 (historical implications)

歴史的に古い形式が幼児語に現れるようにみえるものもあるが：

- ea→pa:pa～ba:ba 「肉」
- ja→bja² 「鳥」
- gu→godo 「9」
- lau→dla pa 「月」
- dau→dar pa 「バターミルク」
- ŋa.teu→ŋap.teu³ 「50」
- gu.teu→gup.teu 「90」

5 小結

本稿ではマンデ語の幼児語に見られる言語特徴についてその概要を報告した。今後は、全ての環境で生じる音変化、特定の音韻論的条件下でのみ生じる音変化、形態論的・形態音韻論的条件下で生じる音変化、特定の文法範疇に生じるがその範疇に属する項目全てを変化させるとは限らない音変化、借用により生じる音変化等をより深く検討する。また語種の判別を行った上で借用語音韻論や他の TB 諸語の語形との比較についても調査を進めていく。

謝辞

本稿は先住民言語文化研究会第3回例会（2021年2月28日）に発表した内容をまとめたものである。発表者の言語調査にご協力下さった方々、就中、Yeshi Nedup 氏及びそのご家族の皆様、Phuntsho Tashi 氏及びそのご家族の皆様、Dzongkha Development Commission (ཇོ་མོ་གླང་མ་རྒྱུ་རྒྱུ་ཚོགས་པའི་) の皆様並びに Pema Wangdi 氏に記してお礼申し上げます。初稿にコメントを下された鈴木博之さん、鄭雅云さんにもお礼申し上げます。

参考文献

Austerlits, Robert. 1956. Gilyak nursery words. *Word*. 12: 260-279.

² 摩擦音は破擦音になる、つまり ja は dja になるためこうなるものと考えられる。また bja が ja となることもあるがそれとの同音衝突を避けているか混同している可能性もある。

³ 「50」及び「90」に関しては、大人が子供に話しかける際に/p/を発音している可能性がある。白井(1999)ではチベット語にみられる語源的に遡れない b の挿入について論じている。

- Bhat, D.N. Shankara. 1967. Lexical suppletion in baby talk [Kannada]. *Anthropological Linguistics*. 9.5:33-36.
- Casagrande, Joseph B. 1948. Comanche baby language. *International Journal of American Linguistics*. 14: 11-14.
- Ferguson, Charles A. 1964. Baby talk in six language. *American anthropologist* 66.6.2: 103-114.
- Kelkar, Ashok. 1964. Marathi baby talk. *Word*. 20: 40-54.
- 西田文信. 2022. 「マンデ語の身体部位名称」 『言語記述論集』 14:145-156.
- 白井聡子. 1999. 「チベット語現代ラサ方言の 2 音節間に現れる -b- について」 『言語学研究』 17-18 : 59-72.
- 土田滋. 1973. 「台湾中部高砂族諸語における幼児語」 『アジア・アフリカ文法研究』 2: 1-51.
- Tsuchida, Shigeru. 2009. Motherse and historical implications. In Alexander Adelaar and Andrew Pawley eds., *Austronesian historical linguistics and cultural history: a festschrift for Robert Blust*. pp.107-114.
- Voegelin, C.F. and Robinett, Florence M. 1954. 'Mother language' in Hidatsa. *International Journal of American Linguistics*. 20: 65-70.
- 柳田國男. 1937. 「幼言葉分類の試み」 『柳田國男全集』 20: 429-488. 筑摩書房.

受理日 2024 年 4 月 9 日